

第24回東伏見スポーツサイエンス研究会

グローバルCOEプログラム「アクティブ・ライフを創出するスポーツ科学」

日時 2013年12月16日(月) 18:15より

場所 早稲田大学79号館(STEP22)302号室

演題

戦時期の陸海軍とスポーツ：
ホッケーはなぜ明治神宮大会の種目から外されたのか？

高嶋 航 先生
(京都大学)

1941年、新体制運動の高まりのなかで開かれた第12回明治神宮国民体育大会は、空前の規模で開催された前年の大会から一転して、競技種目や参加人数の制限が実施され、体育・スポーツの戦時体制化のさきがけとなった。このとき除外された競技はホッケー、重量挙げ、卓球、ハンドボールであった。このうち、ホッケーは陸軍が普及に力を尽した競技であり、なぜ真っ先に除外されたのか、拙著『帝国日本とスポーツ』では明確な説明をすることができなかった。その後、軍隊とスポーツの関係について研究を進めていくなかで、ホッケー除外には大きな意義があったのではないかと考えるにいたった。陸軍はこれまで軍隊にもっともふさわしいスポーツであるとみなしてきたホッケーを除外することで、あらゆるスポーツが戦時期にふさわしいものではないというメッセージを発したのではないか。かつて陸軍戸山学校でホッケーの選手だった軍人は、この時期までにスポーツに対して批判的な態度をとるようになっていた。陸軍戸山学校にホッケーを導入し、ホッケー協会の副会長、ベルリン・オリンピックのホッケー日本代表チームの総監督をつとめた加藤真一もその一人である。加藤は学徒スポーツの終焉に大きな影響を及ぼした1943年1月21日の愛知県の野球排撃決議にも関与していた。戦時日本の学徒スポーツは、スポーツに理解のない軍人によってではなく、スポーツをよく識る軍人によって窒息させられたといえよう。



早稲田大学 スポーツ科学学術院
Faculty of Sport Sciences, Waseda University

世話人：正木宏明・紙上敬太
早稲田大学 スポーツ科学学術院
E-mail: masaki@waseda.jp